

根源的な非本来性とケア

——『存在と時間』における「依存忘却」について——

松本 卓也（京都大学）

Original inauthenticity and care

—— *On the forgottenness of dependency in Being and Time*

Takuya MATSUMOTO

In his theory of care (*Sorge*) in *Being and Time*, Heidegger distinguishes three types of care; (1) concern (*Besorgen*), (2) substitutional care (*einspringende Fürsorge*), which sometimes at risk of leading to “dependence” or “domination” and is associated with the One (*das Man*), and (3) preceding care (*voraustringende Fürsorge*), which is associated with emancipation and authenticity (*Eigentlichkeit*). In response to this argument, the Daseinanalysis of Medard Boss and the phenomenology of care influenced by Benner and Wrubel’s *The Primacy of Caring* have focused especially on the consideration of (3) preceding care.

On the other hand, however, Heidegger in *The Basic Problems of Phenomenology* states that the self-understanding of the One is not ungenue (*unecht*). Therefore, it is necessary to examine not only (3) preceding care, which has been emphasized so far, but also how (2) substitutional care functions and what role it plays in clinical practice.

What we have focused on is the discussion of the treatment by Ludwig Binswanger and Wolfgang Blankenburg, where they rather seem to emphasize (2) substitutional care. By referring to Simon Critchley’s concept of “original inauthenticity,” their arguments allow us to reassign clinical significance to concepts that have not been previously regarded as authentic. Heidegger’s theory of care, then, is re-interpreted as not designed to criticize “dependence,” but to appreciate “dependence on others” in a positive sense as seen in self-help groups such as Alcoholics Anonymous or Tojisha-kenkyu.

Keywords: inauthenticity, care, dependence, phenomenological psychopathology

キーワード：非本来性、ケア、依存、現象学的精神病理学

1. はじめに

精神病理学は、マルティン・ハイデガーの哲学から大きなインスピレーションを得ることによって発展してきた。とりわけ、人間（現存在）を世界内存在として——つまり、単に客観化可能な現実のなかにあるものとしてではなく、世界の成立それ自体と切り離すことができないものとして——捉える見方は、統合失調症やうつ病といった病理を患う人々がどのように世界を経験し、また自己を経験しているのかを明らかにするための手がかりとなった。すなわち、病者においては、世界の成立と自己の成立の両方が（等根源的に）うまくいかななくなっているのであり、そのような事態がこれまで精神病理学者によって「自然な経験の非一貫性」（ルートウィヒ・ビンスワンガー）や「自然な自明性の喪失」（ヴォルフガング・ブランケンブルク）といった用語でピン留めされてきたことは周知のとおりである。

そのようなハイデガーの哲学の臨床的応用のなかで、私たちにとって特に興味深いのは、ビンスワンガーによる「人間学的均衡」論¹である。この議論の要点は、人間（現存在）を垂直と水平の2つの方向の拡がりの空間のなかに棲まう存在者と捉え、精神的な「健康」とは垂直方向と水平方向のあいだにちょうどいい均衡が取れていることであるとする考え方である。特に統合失調症の場合では、病前から「自然な経験の非一貫性」のために世界のなかに自然に棲まうことができずに、水平方向（身近なひとびとや隣人との付き合いや、世界を旅して見聞を広げること——こういった表現においていずれも水平方向の拡がりに関連する言葉が用いられることは理由のないことではない）の空間がやせ細ってしまう。そのため、いわばそのような苦難を一撃でなんとか解決しようとして、垂直方向の高み——たとえば、「神の似姿である人間の理想とは何か？」「父であるとはどのようなことか？」「主体とは何か？」といった問いと、その問いのたったひとりでの解決の試み——へと過剰に跳躍する「思い上がり（Verstiegenheit）」が生じる。統合失調症はこのような垂直方向と水平方向のあいだの均衡を欠くがゆえに、挫折すなわち墜落を運命づけられた飛翔としての「思い上がり」のなかで発病するのだとビンスワンガーは考えたのである。

この考えは、20世紀の精神病理学の思考の型を、ひそかに、しかしそのぶん強力に規定してきたように思われる。実際、木村敏は自分の仕事が「ビンスワンガーから何かを引っ張り出して、自分自身の中へ取り込んだ」²ものであることを隠していない。ビンスワンガーは、空間論として構想されたその「人間学的均衡」論において、垂直方向における「上昇」を表す表現の背後には時間性が同時に意味されていると指摘していたが、木村の名高い「アンテ・フェストゥム」論はまさにビンスワンガーの垂直方向を時間論へと置き換えたものにほかならない。また、のちに述懐しているとおり、この時期の木村は「自己を垂直に掘り下げてそこに時間との等根源性を見出し、他者との水平的な関係もそれ〔＝垂直

¹ ルートウィヒ・ビンスワンガー（宮本忠雄、関忠盛訳）『思い上がり・ひねくれ・わざとらしさ —— 失敗した現存在の三形態』、みすず書房：東京、2000年。

² 木村敏、村上靖彦「統合失調症と自閉症の現象学」『現代思想』、38(12)、2010年、34-58頁。

方向]に吸収しつくそうという方向で動いていた」³のであって、ここには統合失調の病理の把握のみならず、精神病理学の基本的傾向としての垂直方向の特権化と呼ぶべき事態が明白にあらわれている。

また、すでに別稿で論じておいたとおり、フランスにおけるハイデガー受容においても、当然のように時間論が重視されると同時に、やはり垂直方向の特権化と呼ぶべき事態が生じていた⁴。精神分析においても、たとえばジャック・ラカンの1953年の「ローマ講演」⁵では、精神分析においてなされる語り（パロール）が、「空虚な語り（parole vide）」と「充実した語り（parole pleine）」の2つに分極させられているが、前者（たとえば、身近な他者への不平不満）が想像的な誤認（méconnaissance）のみをもたらすのに対して、後者（たとえば、症状を形成している言葉に刻まれた主体の象徴的布置への気付き）は時間の契機を通じた主体の歴史の象徴的な承認（reconnaissance）をもたらすうるとして、後者にのみ高い価値が与えられている。この2分法がハイデガーの「空談（Gerede）」や「運命（Schicksal）」についての考察に端を発していることは言うまでもない。ラカンは、分析家と分析主体（被分析者）のあいだの関係が、自我ともうひとつの自我のあいだの横並びの関係でしかないような分析実践を痛烈に批判したが、それは（自我ともうひとつの自我ではなく）主体と〈他者〉の垂直的な関係を重視するためであったのである（このことは、分析主体を寝椅子に横たわらせることによって、ふつうのカウンセリングにみられるような横並びの関係を上下の非対称的な関係へと人工的に変貌させる、という精神分析技法の基礎とも無関係ではない⁶）。

だとすれば、このように垂直方向の特権化してきた精神病理学と精神分析は、それ自体が人間学的均衡を欠いたものとも言えるのかもしれない。実際、斎藤環⁷は、精神病理学やラカン理論の「現代思想」的受容がしばしば「ここに人類の究極のアポリアの一つがあるのだ」式のクリシェに陥る一方で、治癒のための理論としては不十分であり、中井久夫を例外として治癒の実相（寛解過程）を十分に正確に記述することができなかったことを強く批判しているが、それは垂直方向の特権化とそれに伴う水平方向の等閑視によって生じたことであるように思われる。

また、このような批判は単に精神病理学や精神分析におけるハイデガー受容の特徴に向けられたものであるにとどまらず、特に精神病理学において「治癒」や「回復」の理論がおろそかになっていたというきわめて具体的かつ深刻な瑕疵に向けられたものでもある。実際、「べてるの家」の活動で知られるソーシャルワーカーである向谷地生良によれば、統合失調症の患者は、高みにいる「神」の話ではなく、日常における隣人の話ができるようになったときに、ようやく回復のプロセスが始まるのだという。

³ 木村敏『精神医学から臨床哲学へ』、ミネルヴァ書房：京都、2010年、240頁。

⁴ 松本卓也「水平方向の精神病理学に向けて」『at プラス』、30、2016年、32-51頁。

⁵ Jacques Lacan, *Fonction et champ de la parole et du langage*, in *Écrits*, Seuil: Paris, pp. 237-322, 1966.

⁶ 松本卓也「オープンダイアログと精神分析」『オープンダイアログ 思想と哲学』、東京大学出版会：東京、2022年。

⁷ 斎藤環、村上靖彦「オープンダイアログがひらく新しい生のプラットフォーム」『現代思想』、44(17)、2016年、28-58頁。

向谷地 面白いのはね、そういう話をしていくなかに、〔身近な〕他者が出てこないんです。さっきの神様とのテレパシーもそうだけど、話題はつねに「テレパシーと神」なんですよ。／——神と1対1なんですね。／向谷地 リアルワールドじゃない「アナザーワールド」のなかでその関係に苦しんでいるんです。食事がまずいとかおいしいとか、誰々さんのことが好きだとか嫌いだとか、そういうリアルな現実との話がほとんど出てこないですよ。だから、そういう話が出てくると、「あっ、回復が始まったな」と思う。むしろ、そういうことをいかに起こしていくか、っていうことです。⁸

もちろん、このような水平方向の治癒論・回復論が、精神病理学においてこれまでまったくなされていなかったわけではない。後述するように、ほかならぬピンスワンガーが、治癒は垂直方向の「父」から水平方向の「隣人」への方向転換において起こる（症例イルゼ）と述べているのである。また、精神分析においても、ラカンよりも後の世代の哲学者・臨床家であるフェリックス・ガタリやジャン・ウリには、垂直方向を特権化する議論への抵抗を読み取ることができる。ガタリやウリがしばしば用いる「斜め横断性（transversalité）」という空間的な概念は、精神科病院のなかでの日常的な実践において、^{よこならび}水平性と^{おしつけ}垂直性をともに乗り越えるためのものとして用いられている⁹。このことは、垂直方向の特権化と水平方向の軽視を逆転させ、単に水平方向を重視すれば良いというわけではなく、そもそも水平方向とは一体どんなものであるのかを探求した上で、あらためて垂直方向と水平方向の「均衡」について考えることが必要であることを示唆しているように思われる。

では、水平方向において、一体どんなことが起こっているのだろうか。本稿では、それを明らかにするために、ハイデガーの『存在と時間』¹⁰を再検討してみることにしたい。この作業は、先述したとおり垂直方向の特権化を基調としてきた精神病理学を現代において鍛え直すためにも重要であるように思われる。

2. ハイデガーの「気遣い」論について

さて、私たちは、ピンスワンガーの空間論的な「人間学的均衡」論から出発し、特に水平方向の空間において何が生じているのかを問うている。ハイデガーにおいては、空間は人間（現存在）が道具と交渉する場として捉えられており、私たちのいう水平方向における他者との関わりは、特に彼の「気遣い（Sorge）」論において展開されている。

⁸ 向谷地生良「向谷地さん、幻覚妄想ってどうやって聞いたらいいんですか？（第1回）その神様ってどのへんにいるんですか？」『精神看護』, 19(2), 2016年, 137-142頁。

⁹ フェリックス・ガタリ（杉村昌昭, 毬藻充訳）『精神分析と横断性』, 法政大学出版局：東京, 1994年, 131頁。

¹⁰ 以下、『存在と時間』（熊野純彦訳, 岩波文庫：東京）からの引用については、文献指示が煩雑になることを避けるために、本文中に「SZ」の記号の後に原書ページ数と段落番号を記す。『ハイデッガー全集』（創文社：東京）からの引用については、同様に「GA」の記号の後に原書ページ数を記す。

まず、ハイデガーの気遣い論の概略を確認しておこう。以下、気遣いについて論じられている『存在と時間』26節を中心に、その下書きとも言える『論理学——真理への問い』における気遣いへの言及（GA21, 220-234）も参照しつつ説明することとするが、彼によれば、気遣いには大きく分けて「配慮的な気遣い＝配慮（Besorgen）」と「顧慮的な気遣い＝顧慮（Fürsorge）」があるのだという。「配慮」とは、「世界内部的に手もとにあるものに目くばりしながら交渉すること」（SZ121/330）である。対して、「顧慮」とは、「現存在が共同存在としてかかわる存在者」への気遣いのこと（SZ121/330）である。簡単に言えば、「配慮的な気遣い」は世界のなかにあるハンマーのような道具（物）への気遣いであり、「顧慮的な気遣い」は同じ世界に棲まう他者（人）への気遣いであるといえよう。

ハイデガーは、後者の「顧慮」を、さらに2つに分けている。ここでは、しばしば使われる用語法に従って、一方を「尽力的顧慮（einspringende Fürsorge）」、他方を「垂範的顧慮（vorausspringende Fürsorge）」と呼んでおこう。こうして、私たちは気遣いのうちに、①「配慮」、②「尽力的顧慮」、③「垂範的顧慮」の3つを区別できることになる（表1）。

表1 ハイデガーにおける3つの気遣い

気遣い (Sorge)	③本来的な顧慮的な気遣い 垂範的顧慮（vorausspringende Fürsorge）	他者への気遣い （垂直方向の気遣い） → 本来性
	②（非本来的な）顧慮的な気遣い 尽力的顧慮（einspringende Fürsorge）	他者から気づかいを取去る気遣い、手もとにあるものを介した他者への気遣い （水平方向の気遣い） → 依存・支配
	①配慮的な気遣い（Besorgen）	手もとにあるもの（道具）への気遣い

②の尽力的顧慮の例として、ハイデガーは「食べるもの、着るものについての「配慮的な気遣い」や「病んだ身体の看護」といった事柄を挙げている。ここで注意しておかなければならないのは、「病んだ身体の看護」がまさに他者への気遣いと言うべきものであるのに対して、「食べるもの、着るもの」への気遣いは、それ自体は①の配慮であるという点である。ここでハイデガーが言おうとしているのは、他者がどんなものを食べるべきであるか、着るべきであるか、ということであり、それはいわば①の道具（物）への配慮を通じた、他者への気遣いなのである。実際、ハイデガーは「Fürsorge」という言葉が「福祉」を

意味することを意識しつつ、「事実的な社会制度としての「顧慮的な気遣い」 [=福祉] (…)
がじじつ緊急に必要であることは、顧慮的な気遣いが欠如した様態のうちに、現存在がさ
しあたりたいていは身をおいている事情に動機づけられたものである」(SZ121-2/331) と
述べているが、たとえば貧困の事例について考えてみれば、②の尽力的顧慮に道具（食
物や着るもの）への配慮を通じた他者への関係が含まれることには不思議な点はない。

ところが、このような②の尽力的顧慮には、否定的な側面も存在する。ハイデガーは、
「たがいに協力し、反目しあい、また、たがいにそしらぬ顔をしあったり、すれちがった
り、こころに懸けあわなかつたりすることも、顧慮的な気遣いの可能な様式である。しか
も、最後に列挙した欠如と無差別という様態こそが、まさに日常的で平均的な共同相互存
在を特徴づけるものにほかならない」(SZ121-2/331) と述べており、つまりは気遣いには
気遣わないことも含まれるというのである。

また、仮に②の尽力的顧慮という仕方で他者を気遣ったとしても、それは他者の代わり
に「してあげる」気遣いにすぎない場合もある。『論理学』においては、この②の尽力的顧
慮は「非本来的な顧慮的な気遣い」であるとされているが、それは、この気遣いが、他者
が自分で配慮すべき（あるいは、自分で配慮できるようになるべき）事柄について、その
ひとの代わりに「してあげる」という形式でなされるものである以上、他者の現存在は自
らの気遣いを取り去られてしまい、固有な自己を喪失した「非本来的な現存在」にとどま
ってしまうからであるとされている（GA21, 223-4）。『存在と時間』においては、②の尽
力的顧慮について「非本来的」という形容はなされていない。しかし、それでも「そうした
顧慮的な気遣いにあっては、他者は依存し支配される者(…)となる場合がある」(SZ122/332)
と言われているように、「依存」や「支配」といったあり方に陥る危険性をもつのが、この
②の尽力的顧慮なのである。池辺が、「他者のために」という思いが判断の根拠であるに
せよ、他者の代わりに問題を引き受けて問題の解決にあたることは、自らの価値観を他者
に押しつけることを強いる。さらには当事者である他者の意志を押さえつけてしまうこと
にもなりかねない」ことから、これを「パターンリズム的な性格に満ちた顧慮」¹¹と呼んで
いることも頷けるであろう。

他方、③の「垂範的顧慮」は、『論理学』と『存在と時間』の両方において、「本来的」
であるという形容がなされている。というのも、この気遣いは「他者の代わりに飛び込む
というよりは、その他者の実存的な存在可能についての当人に先だつて飛び、他者から「気
遣い」を取りさるのではなく、気遣いを本来的にそのものとして他者に与えかえす」
(SZ122/333) 可能性をもっているからである。実際、他者に対して「ああしろ、こうしろ」
と言うことは②の尽力的顧慮に相当するが、そのような気遣いが他者を自分の思うように
支配したり依存させてしまう可能性があるのに対して、他者に対して具体的な指示をする
のではなく、何かを手本のようにやってみせ、その姿をいわば「背中で語る」ような仕方
で他者に見せることによって、他者が自分自身で思考したり行動したりすることを可能に
することは③の垂範的顧慮に相当するであろう。その意味で、この本来的な気遣いは、現

¹¹ 池辺寧「ハイデガーにおける気づかひの概念 —— ケア論への応用をめぐって」『介護福祉学』,
14(1), 2007年, 17-26頁。

存在が固有な自己を獲得することで他者にも効果が及ぶような「本来的な顧慮的な気遣い」であるとされているのである（GA21, 224）。

なお、『存在と時間』において、26節の気遣い論につづく27節以降では、②の尽力的顧慮だけが取り扱われ、そこから世人（das Man）による平準化（Einebnung）、公共性（Öffentlichkeit）の議論が展開される。言い換えるなら、②の尽力的顧慮は、前節で述べた水平方向の空間を規定する気遣いのあり方であり、それゆえに人間（現存在）を横並びにしてしまう、と考えられているのである。反対に、『存在と時間』において③の垂範的顧慮が再び取り上げられるのは、単独化し、決意した現存在が、他者たちにとっての「良心」となる際の——いわば垂直方向の——気遣いとしてである（SZ298/898）。ラカンの用語を使うならば、前者の②は「空虚な語り」に、後者の③は「充実した語り」にそれぞれ対応する気遣いとして位置づけられていると言えるだろう。

3. 「気遣い」論の臨床的応用 I

——メダルト・ボスと現象学的看護論における本来性の重視

さて、この③の垂範的顧慮の特徴について、一点指摘しておきたい。すなわち、この気遣いは、「本質的に、本来的な気遣いに——すなわち他者の実存に——かかわるものであって、他者が配慮的にきづかう〈なになに〉(Was)にかかわるものではない」（SZ122/333）とされており、つまり、ハイデガーの気遣い論において、②の尽力的顧慮は①の配慮と関わりがあるのに対して、本来的であるとされる③の垂範的顧慮においては①の配慮とは関わらないとされているのである。

このような特徴は、ハイデガーの気遣い論を臨床に応用する際に、際立ってくる。たとえば、メダルト・ボスは、フロイトの技法論をハイデガーの気遣い論を使って解釈し、現存在分析家は②の尽力的顧慮をしてはならず、③の垂範的顧慮を目指すべきであると主張している。

かかる《尽力的な顧慮》を避けるようにとの注意に相応して、分析医のとるべき心構えについてのフロイトの積極的な規定は、本質的には以下のような意味になる。分析医は患者との関係においてつぎのような顧慮をしなければならない。つまり他人のために尽力するというよりは、彼のためにその実存的存在可能について先立って手本を示し（Vorausspringen）、彼から《悩み》（Sorge）を取り去るのではなく、むしろまさに悩みを悩みとして本来的に彼に返し与えるのである。かかる顧慮こそ他人をしてみずからが悩みのうちにあることを透見させ、それにむかつて自由になることを助けるのである。しかしながら現実には患者に対して人間として先立つ（voraus）ためには、医師自身がまず《分析的純化》をうけていなくてはならない。¹²

¹² メダルト・ボス（笠原嘉，三好郁男訳）『精神分析と現存在分析論』，みすず書房：東京，1962年，

なるほど、たしかに臨床場面において、患者に個別の事柄について「ああしろ、こうしろ」ということは、たとえそれが成功したとしてもハイデガーが言うように「依存」や「支配」を生み出してしまいうだろう（これは、フロイトが催眠を放棄した理由でもあった）。そして、自分のことを自分自身で悩む——この言葉が適切かどうかは別として——力をつける（させ）ることの重要性は言うまでもないだろう（ゆえに、ラカン派では被分析者のことを分析主体と呼ぶのである）。このような考え方は、ラカンが、自我と自我のあいだの水平的な関係ではなく、主体と〈他者〉のあいだの垂直的な関係を重視したこととも対応している。

しかし他方で、もし③の垂直方向の気遣いに際して、ハイデガーが言うように「他者が配慮的にきづかう〈なになに〉」が一切関わってこないとすれば、それはあまりにも形式的な議論になってしまうのではないかという懸念がある。一方に他者（＝治療者）がいわゆる空白のスクリーン（自分を映す鏡）となるという理想があるとしても、他方ではその他者（＝治療者）は自分の何に着目しているかに気づくことを通じて、自分が何を避けているのかが明らかになったり、思考が進んだりすることは珍しくない。

また、ベナーとルーベルの現象学的看護論においても③の垂範的顧慮が重視されており、彼女らはこの気遣いを「看護ケア関係における究極的な目標」とまで評価している。というのも、「それは他者がこうありたいと思っているあり方でいられるようその人に力を与えるような関係であり、看護関係の究極的な目標をなすものである」¹³からである。しかし、この議論は、看護ケアにおいて他者との関係のなかで自分が具体的な何に配慮するかというきわめて重要な問題を等閑視させてしまいかねないように思われる。実際、榊原¹⁴が指摘しているように、現象学的看護研究においてしばしば記述される「他者を介した」看護師の自己了解は、単に「非本来的」なものとして切り捨てられるべきではないが、きわめて具体的な何にと関わるそのような気遣いについての考察は、③の垂範的顧慮に関する議論を参照することによって逆に困難になってしまいかねない。

また、ベナーとルーベルが称揚する③の垂範的顧慮について、やはり榊原が「前もってその他者の前で飛んで手本を示す（vorausspringen/vorspringen）」関係は、なるほどその他者と「向き合って」はいるかもしれないが、同じ方向を目指して共に歩もうと「寄り添う」関係にはなっていないこと、そして、「決意した現存在は他者たちの「良心」（*»Gewissen«* der Anderen）となることがありうる」というハイデガーの良く知られた言明に、ある種の「押しつけがましさ」を感じるのは私だけではない¹⁵と述べているように、②の尽力的顧慮がパターンリズム的であるのとは少々違った意味において、③の垂範的顧慮もまたある

52-53 頁.

¹³ パトリシア・ベナー、ジュディス・ルーベル（難波卓志訳）『現象学的人間論と看護』、医学書院：東京、1999年、55-56頁。

¹⁴ 榊原哲也『医療ケアを問い直す ——患者をトータルにみることの現象学』、筑摩書房：東京、2018年、74頁。

¹⁵ 榊原哲也「フッサールとハイデガー ——ケアという事象をめぐる」『Heidegger Forum』、9、2015年、112-125頁。

種のパターンリズムに陥らないわけではないであろう¹⁶。

4. 「気遣い」論の臨床的応用Ⅱ ——精神病理学的治療論における非本来性の重視

ところで、本稿の冒頭で引用した、回復の始まりにおいて現れるとされる「食事がまずいとかおいしいとか、誰々さんのことが好きだとか嫌いだとか、そういうリアルな現実との話」とは、いったいどのような気遣いなのであろうか。「誰々さんのことが好きだとか嫌いだ」といった事柄は、他者への気遣いであり、かつ、本来的な③の垂範的顧慮ではないような気遣いである。また、「食事がまずいとかおいしいとか」は①の配慮であるように思われるが、このような気遣いが回復の始まりを画すると言われるのは、それが他者への気遣い（この食事を作ったのは誰であり、周りの人々はこの食事をどのように捉えているか）が問題になるからであろう。だとすれば、このような気遣いは、もちろん、それはハイデガーが②の気遣いの説明において論じていたような、他者を依存させたり支配したりする結果に終わる気遣い（尽力的顧慮）とは異質な点も含むものであるが、『存在と時間』における理論的可能性としては、『論理学』において非本来的とされていた②の気遣いの一種として分類しておくしかないように思われる¹⁷。というのも、ここで言われている「リアルな現実との話」においては、自分が道具や他者に対してもつ配慮や、そして自分の道具との関わりに対して他者がもつ顧慮が問題となるはずであり、つまりは本来的とされる③の垂範的顧慮においては等閑視されてしまう何かが重要視されているからである。

そして、このような②の気遣いの重要性については、「気遣いに対する愛の現象学的優位」を主張するビンスワンガーの『人間的現存在の基本形態と認識』¹⁸における主張や、〈きみ〉と〈私〉という相互性を重要視し、③の垂範的顧慮においても他者との共通性が必要であるとしたカール・レーヴィットの『共同存在の現象学』¹⁹において、すでに気づかれていたように思われる。ところが、このような——『論理学』における形容を借りれば——非本来的な気遣いの可能性について、これまでの現象学的看護論と、その流れをくむケアの現象学では十分に扱われてこなかったように思われるのである。

もっとも、ハイデガー自身は、②の尽力的顧慮を単に否定的なものとして退けているにすぎないというわけでもない。実際、『論理学』において②の尽力的顧慮に対して与えられ

¹⁶ 実際、現代のいわゆるパワーハラスメントの事例には、仕事において上司が「ああしろ、こうしろ」と言うのではなく、むしろ「そんなこともわからないのか!」「自分で考える!」と言うことによって、部下から「《悩み》(Sorge)を取り去るのではなく、むしろまさに悩みを悩みとして本来的に彼に返し与える」仕方となされているものも多いのである。

¹⁷ というのは、②の気遣いが支配や依存に陥ってしまうという事態は、あくまでも「可能性」として記述されているからである (SZ122/332)。なお、ハイデガーは、②と③の気遣い「のあいだで日常的な共同相互存在は保たれ、多様な混合形式を示す。それらを記述し分類することは当面の探究の埒外にある」(SZ122/335) と言いつつ、その混合形式については論じていない。

¹⁸ Ludwig Binswanger, *Grundformen und Erkenntnis menschlichen Daseins*. Niehans: Zürich, 1942.

¹⁹ カール・レーヴィット (熊野純彦訳) 『共同存在の現象学』, 岩波文庫: 東京, 2008年, 195-199頁。

ていた「非本来的」という形容は、『存在と時間』においては（おそらくは熟考の末に）外されているのである。また、先述したように、②の気遣いは世人による平準化を帰結するものとされているのだが、『現象学の根本諸問題』においては、「非本来的」とされる「世人」の自己理解は真正でないわけではなく、「実存しつつ情熱的に諸物に没頭することの内部で、このように自らをもつことは、立派に真正であることができる」とも述べられている（GA24, 228）。言い換えるなら、ハイデガーの議論のなかには、「本来的」でかつ「真正」である③の垂範的顧慮だけでなく、「非本来的」でありながらも「真正」であるような②の尽力的顧慮にも同様に重要性を与えることのできる読み筋が走っているのである。

私たちの考えでは、ハイデガーの影響を大いに受けた現象学的精神病理学にもまた、まさに非本来性に重きを置く議論があったように思われる。たとえば、ブランケンブルクは『自明性の喪失』の短いデカルト論において、次のように述べている。

デカルトは、近代哲学の口火を切った彼の懐疑の試みを始める前に、まず当時の知識をくまなく身につけようと努力したと書いている。彼は、伝統的学説の妥当性について最初にいくつかの疑惑を抱いた後も、すぐさまこの実験へと飛び込んで行ったわけではない。一切の懐疑にもかかわらず彼はまず自分の教義を完全なものにした上で、次には理論的知識の全領域に加えて、さらにできる限り広範囲な自然な（生の）経験を身につけるための旅へと出かけた。つまり彼はいわゆる「世間の人」²⁰となった。そしてその後にはじめて、彼の実験にとってどうしても必要な極限的な孤立を自らに課したのである。（…）彼が『方法叙説』の冒頭で、「健全な人間悟性」（良識）を宣言しているのも偶然ではない。彼によると、これほど公平に分配されているものはこの世にないのである。²¹

つまり、デカルトは「コギト」という哲学史上の重大な跳躍——幼少期から故郷に安心できるような居場所がなく、まさに水平方向がやせ細っていた彼にとって、この跳躍はまさに発病と引き換えになされるはずの「思い上がり」でありえた²²——に先立って、各地を放浪し、十分に「世人」となることによって、水平方向の拡がりを確保していたのである。言い換えるなら、彼は「見る前に跳ぶ」のではなく、「跳ぶ前に見る」ことによって、発病を回避しえたのである。

ビンスワンガーもまた、「思い上がり」による発病した統合失調症患者にとっては、水平方向の「隣人」との関係が再構築されることが回復につながると考えている。この点については、以下の一節を読めば十分であろう。

²⁰ 原語は「Mann von Welt」である。おそらくはカントの『人間学』を参照していると考えられるこの語については、ハイデガーが「根拠の本質について」において、「日常的現存在の演ずる「演劇」を単に「傍観」しているのではなく、「共演」している者であると注釈していることを想起しておきたい（GA9, 153）。

²¹ ヴォルフガング・ブランケンブルク（木村敏、岡本進、島弘嗣訳）『自明性の喪失 ——分裂病の現象学』、みすず書房：東京、1978年、112-113頁。

²² 松本卓也『創造と狂気の歴史 ——プラトンからドゥルーズまで』、講談社：東京、2019年。

最後に出現した解決、それは愛、浄化、抵抗などの問題を、手段や目的を明確に意識した困難で気長な「心理学的」な仕事という軌道にのせてやる、ひとことで言えば、実践の世界へ移してやるという解決である。そしてわれわれはこういう解決法のみを「健全」だと称する。／人間仲間に向かって差し伸べられたこの救いと労働の用意にあっては、汝と共同世界とはついに宥和し、汝と沈鬱な世界との解離は消えうせ、この抵抗も、もはや苛酷さ、冷酷さ、軽侮、嘲笑などとしてではなく仕事の対象であり仕事により克服しうる「隣人」の悩みとして現われる。²³

さらに、ブランケンブルクは『妄想とパースペクティヴ性』において、このような水平方向の拡がりの確保による治療・回復論をより具体的に論じている。ここで彼は、妄想を「パースペクティヴへの固着」という観点から捉えている。すなわち、妄想は、ある一定の視覚からしか物事を捉えられなくなっているがゆえに生じているというのである。反対に、いわゆる「正常」とされる人々が妄想を抱かないですんでいるのは、「パースペクティヴ交換の能力のおかげ」であるとされる。すると、妄想の治療は、パースペクティヴの可動性や交換能力を獲得することと同義となる。それゆえ、ブランケンブルクは次のようなきわめて具体的な指示を与えることを提案している。

次のような簡単なことから患者と共同の作業をはじめてもよいのではないか。たとえばわれわれが患者に、まずは何か身近にある簡単な物を選んで、それにしばらく注意を固定したり、その周りを巡ってみたり、それをあらゆる方向から観察したりしてみるように言う。うまくいったら、次はもう少し複雑で意味のある物を選んで、同じことをしてもらおう。これを繰り返してみる。その次には、同じ病棟の患者や看護師（最初のうちは、患者とすでにある程度「なじみ」のできている人がよい）のところへ行って、その人たちに特定のことを尋ねてみるように言う。具体的に言えば、たとえば、その人の目には病棟はどのように見えているのか、その人の家族状況や職業上のキャリアをその人がどう見ているのか、といったことを尋ねてくるということをしてもらうのである。そのようにして、患者はいつも「他人の目でものを見る」ように心がける。こうしたトレーニングを、患者の日課とすることも可能であろう。²⁴

ここで言われているのは、要するに、身近な他者が物事をどのように見ているか（他者がどのように配慮しているか）を知ることを通じて、他者とのあいだの水平方向の関係を作り直すことにほかならない。このように考えるなら、現象学的精神病理学においても、実際には③の垂範的顧慮だけでなく、②の尽力的顧慮にも同様の重要性が与えられる必要があったのではないかと考えることができるだろう。

「非本来的」とされることもあった②の気遣いに重要性を与えなおそうとする私たちの

²³ ルートウィヒ・ビンスワンガー（新海安彦，宮本忠雄，木村敏訳）『精神分裂病〈1〉』，みすず書房：東京，1970年，51頁。

²⁴ ヴォルフガング・ブランケンブルク「パースペクティヴ性と妄想」『妄想とパースペクティヴ性 — 認識の監獄』（ヴォルフガング・ブランケンブルク編，山岸洋，野間俊一，和田信訳），学樹書院：東京，2003年，26頁。

解釈は、近年のハイデガー研究においてもそれほど的外なものではないようである。たとえば、ヒューバート・ドレイファスによる「構成的な順応性（conformity）」と「有害な順応主義（conformism）」との区別²⁵は、②の気遣いのなかにある種の肯定的な機能を読み込もうとするものであった。また、より最近では、サイモン・クリッチリーが『存在と時間』をテキスト内在的に注釈することによって、ハイデガーの言う「被投的企投」には、「いかなる実存論的な企投によっても統べることのできない獣じみた事実性」が取り憑いており、それゆえ、非本来的とされたものにも根源性が与えられなければならない、と主張している²⁶。彼によれば、そのように読解することによって、『存在と時間』を「本来性の英雄譚から根源的な非本来性へ」と「アスペクト変換」することができるのだという²⁷。

実際、クリッチリーによれば、非本来性に注目しながら『存在と時間』を読み解くことによって、「社会的な生を、他者への根本的な依存性の関係から構成されたものとして見る」ことができるようになり、それは世人を「〈das Volk [民族]〉の本来性を要する非本来的なあるいは低落した「公共性」として」のみ捉える読解から私たちを解放してくれるのだという²⁸。そのことは、『存在と時間』の実存論的分析論の解釈にも影響を与えずにはおかない。すなわち、彼によれば、その核心は「先駆的決意性を通じて本来的な全体性を達成する英雄的で係累の無い持続的な自己」ではなく、「有限性と良心の関係的な経験を通して形成される非本来的な自己と共に社会性が始まる」²⁹ことにあるのだというのである。言い換えれば、クリッチリーは、ハイデガーについての既存の「実存主義的」な、あるいは孤立主義的な読解への一種の「逆張り」として、「他者たちに依存する」関係、誰でもない世人によって担われているような関係の重要性を主張してみせているのである。このような読解は、垂範的顧慮を重視したボスやベナーとルーベルとは異なった、ハイデガー哲学の臨床への応用を明確化するように思われる。

5. 無人島において、誰が気遣うのか？

私たちは、一般的なハイデガー読解においては否定的なものとして見られてしまいかねない側面をもつ②の尽力的顧慮と呼ばれる気遣いにみられる、治療・回復論へとつながる肯定的な側面に注目してきたのであった。しかし、そのような気遣いは、誰もがやすやすと手にしているものではないか？ という疑問は当然生じてくるであろう。すなわち、そもそも共同存在である人間は、つねにすでに（非本来的な）顧慮をお互いにしあっているのであって、そのような気遣いをわざわざ確保しようとしたり、探求したりする必要はな

²⁵ ヒューバート・ドレイファス（門脇俊介監訳、榊原哲也、貫成人、森一郎、轟孝夫訳）『世界内存在——『存在と時間』における日常性の解釈学』、産業図書：東京、2000年、176頁。

²⁶ サイモン・クリッチリー、ライナー・シュールマン（スティーヴン・レヴィン編、串田純一訳）『ハイデガー『存在と時間』を読む』、法政大学出版局：東京、2017年、256頁。

²⁷ 前掲書、258頁。

²⁸ 前掲書、268-269頁。

²⁹ 前掲書、269頁。

いのではないかと、という問いにあらかじめ答えておく必要があるように思われるのである。

実際、ハイデガーは、「共同存在は、他者が事実的には目のまえに存在せず、知覚されていない場合であっても、実存論的に現存在を規定する」（SZ120/329）と述べており、人間（現存在）にとって気遣いがアプリオリに機能していることを強調している。また、『形而上学の根本諸概念』においても、次のように主張されている。

一人の人間が実存するかぎり、彼は実存する者として既に他の人間たちの中へと移し置かれているのである。事実上近くに他の人間たちがいなくても、である。（…）他の人間たちと同行すること、他の人間たちにおける現 - 存在に同行すること、としての、他の人間たちの中へと自分を移し置くことができること、このことは人間の現 - 存在に基づいて——現存在として、常に既に生起してしまっているのである。（…）したがって、われわれ人間は自分を或る他の人間の中へと移し置くことができるか、という問いは、可能な問いではないゆえに、言うまでもない（fraglos）のである。（GA29/30, 301）

言い換えれば、たとえ無人島にいたとしても、ひとは他者と共にある、というわけである。

ところで、ここで「無人島」という言葉を持ち出したのは、ハイデガーが『存在と時間』において共同存在のあり方について論じる際の参照先が、マックス・シェーラーの『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』であると思われるからである（熊野純彦の示唆による）。シェーラーもまた、人間の共同的なあり方が「アプリオリ」に与えられていることを主張しているのだが、その際に彼は無人島に漂着したロビンソン・クルーソーの物語を以下のように参照している。

かくして各人はある背後根拠の上にあることに気づき、つねに同時に、時間的広がりにおいて出来事としての「歴史」と、同時的広がりにおいて社会的統一態と呼ばれるところのとにかく集中化されている体験諸連関の総体性の「構成員」として自認するのみならず、——各人はまたこの全体のうちなる倫理的主体としてはみずからがつねにまたこの総体性のうちで倫理的に重要なものの全体に対する「共同活動者」、「共同人」として、かつまた「共同責任者」としても与えられている。（…）これらすべてのことは厳密にアプリオリな命題であり、（…）この超越する作用がまた事実的経験のうちで「充実」を見出すかどうかは、この志向的な「ついで意識」の意味と本質にとってはどうでもよいことである。したがって認識＝理論的に虚構されたロビンソン〔・クルーソー〕できえ、一般に人格をともに構成するある種の作用様式を具えた作用の経験的充実が欠けていることを体験している場合でも、自分が一つの社会的統一態のうちなる構成員であることをともに体験するであろう。³⁰

³⁰ マックス・シェーラー（吉沢伝三郎訳）『シェーラー著作集（3） 倫理学における形式主義と実

たしかに、このような記述は、「共同存在は、他者が事実的には目のまえに存在せず、知覚されていない場合であっても、実存論的に現存在を規定する」ということを、ロビンソン・クルーソーという例を使って説得力をもって提示していると言えるだろう。

しかし、無人島における他者について、別様に論じる仕方もある。実際、ミシェル・トゥルニエはダニエル・デフォーの有名な『ロビンソン・クルーソー』に取材して、一種の哲学小説として『フライデーあるいは太平洋の冥界』を執筆しており、さらにトゥルニエの友人でもあったジル・ドゥルーズは『意味の論理学』に収録された「ミシェル・トゥルニエと他者のない世界」において、そのトゥルニエの小説を題材に無人島における他者について論じている。そして、驚くべきことに、シェラーとハイデガーが、無人島においても共同存在というあり方が「アプリアリ」に、ないし「実存論的」に成立することを自明視したのとは反対に、トゥルニエが描く無人島では、他者がいなくなると、世界が構造化されなくなってしまうのである³¹。そのことを、ドゥルーズは次のように表現している。

他者は私の知覚の場の中の対象ではないし、私を知覚する主観でもない。それは何よりもまず知覚の場の構造であって、この構造がなければ、知覚の場の総体はいつものようには作動しなくなってしまう。³²

ドゥルーズによれば、他者とは主観や客観である以前に、知覚の場を構造化するものなのである。ここでドゥルーズが行っている議論は、およそ現象学のそれであり、たとえば、私たちが建物の正面を見ているとき、その裏側や内部を見ることはできないが、それでも私たちがその建物に裏側や内部があることを信じることはなぜかということが論じられている。ドゥルーズによれば、その答えは「対象の中で私が見ていない部分を、私は同時に、他者には見えるものとして措定するから」³³である。だとすれば、無人島のような他者のいない場所においては、トゥルニエの小説で描かれたように、「私の抱く島の光景は切り詰められて、この光景そのものと等しくなってしまう。私が島において見ないものは、絶対に知られないものである」³⁴ことにもなりうる。言い換えれば、他者のいない世界では、知覚の場は私が見ているもの（たとえば、建物の正面のみ）に切り詰められてしまうのである。

質的価値倫理学（下）』、白水社：東京、2002年、232-233頁。

³¹ もっとも、このような問題をハイデガーが論じることができなかったのは、彼がデカルト以来の他我問題を、共同存在という仕方で解決済みとする枠組みをとっていることに起因するのであり、いわばSZの問題設定そのものから起因している。実際、他我を問題として問うフッサールの議論からはこのような問題を扱うことが可能であり、『デカルト的省察』第五省察において、対象の私に見えている面の現前と、私には見えていないが他者には見えている共現前（Appräsentation）とが「融合して、一つの知覚がもつ機能の共同性のうちで働いており、この知覚それ自体が同時に現前するとともに共現前しながら、それでも対象全体に対してはそれ自身がそこにあるという意識を形成している」。Cf. エトムント・フッサール（浜渦辰二訳）『デカルト的省察』、岩波文庫：東京、2001年、218頁。

³² ジル・ドゥルーズ（小泉義之訳）『意味の論理学（下）』、ちくま学芸文庫：東京、2007年、235頁。

³³ 前掲書、232頁。

³⁴ 前掲書、233頁。

知覚の場を構造化してくれる共同存在がアプリアリなものではないというドゥルーズの主張は、単に無人島をめぐる思考実験によってのみ想定されるだけでなく、臨床的な対応物をもっている。実際、自閉症者グニラ・ガーランドは、「例えば私は近所の家々にも内部があるということを知らなかった。すべては芝居の書き割りのように見えていたからである。自分の家の内部には空間があることは知っていたのに、そのちょっとした知識を向かいの家に結びつけることはできなかった。向かいの家は、紙と同じ、平面でしかなかった」³⁵と述べている。このような体験を注釈して、村上は「自閉症をもつガーランドにとって、見えないものは端的に存在しない。奥行きと裏側が存在しない」³⁶と述べている。

このような自閉症者の知覚の場のあり方は、ごく例外的なケースにすぎないと思われるかもしれない。しかし、國分は、ドゥルーズの無人島論と自閉症者のあり方を参照しながら、「奥行きを認識できる定型発達の間人と、奥行きを認識できない自閉症者がいるわけではなく、「他者が存在しているところに生きている人間と、他者が存在していないところに生きている人間がいる」³⁷と考へ、次のように論じている。

さて、以上からひとつの結論を導き出すことができる。知覚の場は他者によって構造化されるのだった。私は自分には見えていない部分を他者には見えているものとして措定する。この措定はしかし、ひとつの条件が満たされることを要求している。どういうことか？ 自分には見えていない部分を他者には見えているものとして措定するためには、その部分を見ている他者が、世界を私と同じように見る者でなければならない。自分と同じように世界を見ている他者がいればこそ、見えていない部分をその他者に託すことができる。自分と同じように世界を見ているとは思えない他者、自分とは根本的に異なる他者には、自分の知覚を託すことはできない。自分がその他者のいる場所に移動したとしたらかくかくしかじかの光景が見えるであろうと思えなければ、自分の知覚をその他者には託せないからである。つまりドゥルーズの他者と知覚を巡るテーゼは、次の結論を内包していることになる。知覚の場を構成するために必要なのは、自分と類似している他者である。³⁸

知覚の場が構造化されるためには、他者がいなければならないが、その他者はどんな他者でもよいわけではない。端的に言って、無人島にも鳥や石といった他者は存在しているが、そのような他者は、私の知覚の場をうまく構造化してくれない。だとすれば、知覚の場が構造化されるためには、私と同じように世界を見えてくれる「類似的他者」が必要であるということになる。このような考へは、自閉症者の知覚のあり方それ自体に何かしらの欠陥があるのではなく、自閉症者が「自分に類似した他者を見つけることに苦勞する」がゆえに、すなわち類似的他者との出会いの機会が十分にないことによって、知覚のあり方

³⁵ グニラ・ガーランド（ニキ・リンコ訳）『ずっと「普通」になりたかった。』、花風社：東京、2000年、70頁。

³⁶ 村上靖彦『自閉症の現象学』、勁草書房：東京、2008年、88頁。

³⁷ 國分功一郎「類似的他者」『ドゥルーズの21世紀』（檜垣立哉、小泉義之、合田正人編）、河出書房新社：東京、2019年、154頁。

³⁸ 前掲書、157頁。

に欠陥が生じさせられているのではないか、と考えることが可能になる。

むろん、厳密にハイデガーを読む立場からは、それでも自閉症者にはなんらかの他者の存在了解があり、気遣いがある、という反論がなされるかもしれない。もちろん、それはある。自閉症者のテンプル・グランディンは、事物を「イメージで思考する」自分の特殊なやり方について、他者たちも同じようにしていると思っていたことを述懐している³⁹。だが、そのような他者は、自分の経験を裏打ちしてくれず、さまざまな場所で困難を引き起こすことになるのである。

ドゥルーズの無人島論と國分の類似的他者論は、エトムント・フッサールの『デカルト的省察』における世界の共同的構成についての議論と突き合わせることができるだろう。フッサールは、人間的な有意味性をもった世界は共同的に構成され、普遍的なものとなっているとしても、それは「別の共同体の出身者には閉ざされている」という——ちょうど、外国に行って自国との文化や習慣の違いにとまどうように。それゆえ、外国を訪れた者（その外国における「異邦人」）は、「[自分とは]異なる世界に属する人間を、当然のように人間一般として理解し、何らかの文化的世界に属する人間として理解する。そこから出発して彼は、これから先の理解可能性を一步一步作り出して行かねばならない」⁴⁰という課題を負うことになるだろう。

すでに見た自閉症者の知覚のあり方の事例は、このような「異邦人」としてのあり方が、単に同じ共同体に属しているのかどうかという問題だけにとどまらないことを示している。國分の議論は、いわば、同じ共同体に属してはいても、類似的他者が十分にいないことによって、同じ共同体のなかの異邦人とならざるをえないマイノリティのことを論じているのであり、彼らはやはり「理解可能性を一步一步作り出して行かねばならない」という困難を抱えているのである。

このような考えは、「自助グループ」の有効性を説明してくれるだろう。アルコール依存や薬物依存のような困難を抱えた当事者が集まり、その中で自分の経験をお互いに語り合うという形で維持・運営されている自助グループでは、自分と同じ経験をしている人同士が集まっている可能性が高く、自分の経験を人に話すことを「恥ずかしい」と感じるものが少なくなる。自分の話を聴いてくれる相手が、自分の話を生々しい実感のこもった「リアル」な話として了解してくれる可能性が高まる。同様の事例は、自閉症スペクトラム者に対する「余暇活動支援」にも見出すことができる。自閉症スペクトラムでは、一般的には「社会性の障害」がみられ、対人的なコミュニケーションが苦手であるとされるが、児童精神科医の本田秀夫によれば、自閉症スペクトラムであり、かつ共通の趣味（たとえば電車への興味）を共有している子どもどうしを集めた余暇活動支援のグループでは、実に充実した共感的なコミュニケーションが——もっとも、定型発達のなものとは異なるオルタナティブなコミュニケーションが——可能となり、高い社会性が発揮されることがわ

³⁹ テンプル・グランディン「世界はあらゆる頭脳を必要としている」, TED2010, https://www.ted.com/talks/temple_grandin_the_world_needs_all_kinds_of_minds/transcript?language=ja, 2010年.

⁴⁰ エトムント・フッサール（浜渦辰二訳）『デカルト的省察』, 岩波文庫：東京, 2001年, 238頁.

かるのだという⁴¹。つまり、自助グループや余暇活動支援のグループにおいては、自分と類似した他者が存在していることによって、世界の理解可能性を作り出すことができるのである。

注意すべきなのは、このような事例において働いているのが、やはり本来的であるとされる③の垂範的顧慮ではない、という点である。というのも、繰り返すが、ハイデガーが本来的な気遣いは「他者が配慮的にきづかう〈なになに〉(Was)にかかわるものではない」(SZ122/333)と述べていたのに対して、自助グループにおいて重要なのは、まさにそれぞれのメンバーの困りごと（あるいは興味をもっていること）について、つまり、それぞれの現存在が配慮的に気遣っている何かについて相互に提示したり、話し合ったりすることにほかならないからだ。

だとすれば、ハイデガーに対して、次のように言えるのではないだろうか。ハイデガーは、②の尽力的顧慮は他者に対する「依存」や「支配」を生み出しうると述べていた(SZ122/332)。しかし、「支配」はさておき、「自分と類似した人がいるのだ」と思えることや、自分の知覚や経験を他者に託すことができること、という意味での「依存」は、決して否定的にのみ論じられる事柄ではない。もちろん、『存在と時間』においても、②の尽力的顧慮はいわばアプリアリな、不可避的なものとされており、ハイデガーがそのような気遣いを否定しようとしていたわけではない。しかし、それは不可避的であるというよりは、むしろ人間（現存在）にとってのよすがであり、マイノリティにとっては獲得されるべきもの、すなわちフッサールのいうように「一步一步作り出して行かねばならない」ものなのである。

次のように言ってもよい。気遣い論に続いて、ハイデガーは「世人」への平準化を批判しているが、逆に、「とりあえずの平準化」が可能になるよりどころとしての他者（＝類似的他者）がいないこと、他者へ「依存」できないことのほうにより深刻な危機があるのではないだろうか？ このことを十分に検討できなかったこと——すなわち、「依存」と「支配」をなんの説明もなく並置してしまい、依存の肯定的な機能を検討できなかったこと——を、私たちはハイデガーの「依存忘却」と呼んでよいのではないだろうか。

なお、この「依存忘却」については、(ケアの現象学ではなく)ケアの倫理から光をあてることができるだろう。たとえば、ケアの倫理においては、「依存」という状態を「人間にとってあってはならない例外的な状態」で「できうる限り克服すべき状態」⁴²と見なすのではなく、誰もが経験する当たり前の状態と見なすことから出発し、私たちが「完全に自立したり、自足的であったりするわけではなく、つねに依存と相互依存の関係を結んでいる」⁴³という認識に至る。近代的な自立した主体という概念への異議申し立てとしてのこのようなケアの倫理の主張を、クリッチリーの根源的な非本来性と結びつけてみることも可能

⁴¹ 本田秀夫「選好性 (preference) の観点からみた自閉スペクトラムの特性および生活の支援」『発達障害の精神病理 I』(鈴木國文, 内海健, 清水光恵編), 星和書店: 東京, 2018年, 97-114頁.

⁴² エヴァ・フェダー・キテイ (岡野八代, 牟田和恵訳)『ケアの倫理からはじめる正義論 ——支えあう平等』, 白澤社: 東京, 2011年, 126頁.

⁴³ 前掲書, 47頁.

であろう。

いずれにせよ、依存にやすやすとあずかれないひとのことが視野から外れていることが『存在と時間』の問題なのである。言い換えれば、ハイデガーの問題点は、他者論がないところにあるのではなく（『存在と時間』の中に他者論は間違いなくある）、他者論のなかにおける「依存忘却」にある。すなわち、首尾よく依存できていない人がいることを無視し、依存において何が起きているのかを問うていないことが問題なのである。

このような考えは、ドレイファスの日常性についての解釈からも光を当てることができるだろう。彼は、ハイデガーの「世人（das Man/the one）」の概念には、ヴィルヘルム・ディルタイ由来の「社会現象の肯定的機能」と、ゼーレン・キルケゴール由来の「公衆」の体制順応主義と凡庸さの否定的帰結の両者が区別されていないと主張する。それゆえ、ハイデガーは「構成的な順応性（conformity）と有害な順応主義（conformism）とを区別しなかった」だけでなく、『現代の批判』におけるキルケゴールの大衆攻撃に感化され、この重要な区別をぼやけさせてしまうのにどんどん手を貸してしま⁴⁴った、というのが彼の主張の骨子であるが、この「世人の肯定的機能」としての「理解可能性の源泉としての順応性」と、「否定的機能」としての「均等化としての順応主義」の区別で言えば、私たちが『存在と時間』から取り出そうとしている「依存」の肯定的機能は、「構成的な順応性」に対応することになるだろう。

6. 平準化、頹落、存在免責の肯定的機能

ここまで私たちは、『存在と時間』の気遣い論が、共同存在としてのあり方がアプリアリに成立していない（首尾よく他者に依存できていない）⁴⁵マイノリティのことを十分に考えてきていないことを指摘してきた。その際に、國分の議論を参照しつつ、クリッチリーと共に、『存在と時間』において「支配」と何の考察もなしに並置されてきた「依存」に、新たな肯定的な意味を与えてきた。このような読解は、『存在と時間』における他の概念にも別の解釈の余地を与えてくれるように思われる。それは、「平準化（Einebnung）」、「頹落（Verfallen）」、そして「存在免責（Seinsentlastung）」である。

まず、『存在と時間』における「平準化」論は、人間（現存在）を横並びにしてしまうものと考えられ、「大衆攻撃」ないし「大衆批判」として捉えられることが常であった。しかし、平準化についての記述は、むしろ、「これまで依存にあずかれなかった人々が、類似的他者との出会いを経て、ようやく安心して依存できる場所を見つけた」ものとして解釈してみる余地があるだろう。

⁴⁴ ヒューバート・ドレイファス（門脇俊介監訳、榊原哲也、貫成人、森一郎、轟孝夫訳）『世界内存在 —— 『存在と時間』における日常性の解釈学』、産業図書：東京、2000年、176頁。

⁴⁵ このような言い方がハイデガーの議論を逸脱するように思われるなら、先程のテンプル・グランディンの例を念頭に置きつつ、「首尾よく成立していない＝首尾よくない形ではとりあえず成立している」程度に読み替えられたい。

このような解釈は、これまで『存在と時間』に与えられてきたイメージを更新するように思われる。実際、②の尽力的顧慮は——『存在と時間』においては「非本来的」という形容がなされていないにもかかわらず——否定的な意味での平準化を招き、そのなかでひとは不安になり、単独化と呼び声の契機を経て自らの負い目を意識し、歴史のなかで「民族」に奉仕するに至る、という『存在と時間』の議論の流れは、ハイデガーのナチス関与と結び付けられて解釈されることもあった。たとえば、アドルノの本来性批判⁴⁶は、ハイデガーが「同一性」や「全体性」を密輸入していることへの批判であり、それは私たちの関心から言い換えるなら、ハイデガーの議論が結局のところマジョリティ的である（マイノリティのことを考慮に入れておらず、仮に非本来性から本来性に至るとしてもその通路と到達地点が多様なものでありうることをあらかじめ排除しているかのようにみえる）ことへの批判にほかならない。

反対に、私たちは、『存在と時間』の「平準化」論を、類似的他者との出会いが乏しいマイノリティについての、きわめて個別的な記述として読むことを提案したいのである。というのも、依存症をはじめとする各種の自助グループに長年関わってきたカウンセラーの信田さよ子によれば、AA（アルコールリクス・アノニマス）などの自助グループに参加していると、「自助グループ用語」のような言い回しが伝染してくるのだという（たとえば、語尾に「ね」を付ける、「ミーティングでおろす」「吐く」「つながった、つながる」等）。これはまさに、『存在と時間』で述べられているとおり、「共同相互存在そのものが平均的なありかたを配慮的に気づかう」（SZ127/351）からであり、「共同相互存在が空談と好奇心およびあいまいさによってみちびかれ（…）そうした共同相互存在のうちに没入」（SZ175/501）しているからである。もちろん、これらは『存在と時間』においては、誰もいない世人によって人が平準化され、頹落した状態にあるということを説明している文章ではあるが、「依存忘却」の視点から読めば別の景色が見えてくるのではないだろうか。たとえば、信田の次のような記述は、まさに平準化と頹落の肯定的機能について論じているように思われる。

自助グループ参加の意義・効果は自己開示をして経験を共有することにあるが、彼らや彼女らの言葉の変化を知るにつけ、独特の語法や言い回しを模倣し使いこなせるようになることがその第一歩ではないかと思われる。一種の符牒のような言い回しであるが、それを使うことでグループの一員になるのだ。おそらく日本で AA が誕生して以来、メンバーの誰からともなく言い始められ、すたれることなく生き残ってきた言い回しなのだろう。それを新メンバーが模倣し、自ら

⁴⁶ 「〈気遣い〉を、「現存在の構造全体の全体性として」〈存在論〉的に規定することによって、〈そこ〉に個別的に存在しているもの（das einzelne Daseiende）を〈現存在（Dasein）〉に移し置き、それによって既に〈全体性〉が取り決められてしまっているということ、そうしておいたうえで、それをくみだしく開陳しているにすぎないということ——この点に、ハイデガーは歩みを止めて思いをめぐらすことはない」。Cf. テオドール・アドルノ（笠原賢介訳）『本来性という隠語 ——ドイツ的なイデオロギーについて』、未来社：東京、1991年、172-173頁。

の経験を表す言葉としてグループで活用していくのである。⁴⁷

さらに信田によれば、このような平準化と頽落（すなわち、「好奇心」ゆえにメンバーの目新しい話を聞き、「あいまいさ」ゆえにどのメンバーも話すことができるような空間のなかで、「空談」ゆえに理解可能性を獲得すること）によって特徴づけられる自助グループでは、自己の責任は、まずは免責されることから生じてくるという。

AC のグループカウンセリングで回復について説明する際、トラウマからの回復といった視点ではなく、親（加害者）を研究することと、責任をめぐる視点の転換をキーワードにする。前者についてはすでに述べているので省略するが、後者については、過剰な責任を背負わされてきた状態（100）から「あなたに責任はない」としていったんイノセンス（0）の地点にまで戻すという説明をする。これを線上に 100→0 へと示し、座標の端から反対の極に移動させる。その後、中間地点に 50 と記し、それを「適正な自己責任」とする。回復とは 0 から 50 の地点に近づくことだと説明する。／（…）イノセンスの自覚は欠かせないが、あくまで通過点（もしくは出発点）なのであり、そこにとどまり続けることは却って新たな問題を引き起こす可能性もあると伝える。

（…）／いったん被害者の立場に身を置くことは、重圧から解放され、これまでの苦悩への意味が付与され、親からの脳内支配にも似た洗脳から脱する出発点になる。しばしば「親を責めてもいいでしょうか」と質問されるが、いったんそれは肯定されるべきだと思う。しかし親への怒りは噴出し始めるとエンドレスにもなりかねず、そのことで逆に批判されて病気扱いされることは珍しくない。責めて怒りを放出することで、新たな執着関係が発生することもある。望ましいのは、イノセンスを十分に受け止められる安全な他者（専門家）がその役割を担うことだろう。⁴⁸

つまり、過剰な責任（100）を負わされている状態から、「あなたに責任はない」と言われ免責されたイノセンス（0）の状態になり、そこからはじめて中間地点（50）にある適正な自己責任に戻ることができるというのである。

同様の事態は、自助グループだけでなく、その影響を受けた当事者研究においても観察できる。当事者研究においてもまた、まずは問題を外在化し、免責した上ではじめて、責任が生成してくるのだという。

当事者研究において重要な点の一つが、外在化を前提にしたメカニズムの解明ということですね。つまり犯人さがしをしない。そして二つめとして、行為や状況を「現象」として捉えたうえで、その現象の研究成果を仲間に向けて発表する。発表を通じて自分がいったいどういう困りごとを抱えているかを仲間と共有し、なぜそうなっているのかを共に研究、解明していく。（…）不思議なことに、一度それらの行為を外在化し、自然現象のようにして捉える、すなわち免責すると、外在化された現象のメカニズムが次第に解明され、その結果、自分のしたことの責任を引き受け

⁴⁷ 信田さよ子『依存症臨床論』、青土社：東京、2014年、193-194頁。

⁴⁸ 前掲書、168-169頁。

られるようになってくるのです。このことが、当事者研究によってわかってきた。とても不思議なことですが、一度免責することによって、最終的にきちんと引責できるようになるのです。⁴⁹

このように、自助グループと当事者研究は、免責するがゆえに責任の引き受けが可能になることを教えてくれるのである。また、特に当事者研究においては、自分にとっての「苦勞」となっている「現象」を外在化し、それがその当事者にとってどのようなものであるのかが語られる。そして、その語りを「聞いている側が変わる」のだという。これはまたしても、「〔他者の〕手もとにあるものの配慮的な気遣い」（SZ122/332）にこそ、重要性が置かれるべきだということを示しているのではないだろうか？

自助グループと当事者研究にみられるこのような免責と責任の引き受けの関係は、『存在と時間』の読者にとっても興味深く映るはずである⁵⁰。実際、ハイデガーは、世人は現存在の「責任を奪い取ってしまう」、つまり現存在を「存在免責」（SZ127/353）してしまい、そこから支配が強まる（SZ128/354以降）のだと述べていた。そして、多くの場合、不安が生じることによって現存在は単独化し（SZ187-188/543）、頹落から連れ戻され（SZ191/552）、非本来性と本来性が二つの可能性としてあらわになるとされている。この議論の流れにおいては、存在免責はいっけん否定的なものとして見られるように見えるが、自助グループと当事者研究の経験を参照するならば、むしろひとは存在免責があるからこそ、責任の引き受けが可能になるという順序を語っているようにも解釈することができるように思われる。空間的に言えば、水平方向の拡がりが増えることによって、ようやく垂直方向の跳躍が可能になるのである。

もっとも、このような読み替えは、ハイデガーの「単独化」の概念と衝突するかもしれない。というのも、単独化とはふつう、文字通りひとが一人になることを意味するからである。実際、ハイデガーは、単独化によって「配慮的に気づかわれたものもとの存在のすべて、他者たちとのあらゆる共同存在が、ものの役にも立たない」（SZ263/788）ことがあらわになると述べており、単独化においては②の尽力的顧慮がなんの役にも立たないと考えているように思われる。

ところが、彼はそれでも同じ段落において、「このことはしかしながらだんじて、現存在のこのふたつの様式〔＝配慮的な気遣いと顧慮的な気遣い〕が本来的な自己存在から切りはなされることを意味するものではな」く、「配慮的な気遣いと顧慮的な気遣い（…）は、実存一般を可能とする条件に属している」（SZ263/788）とも述べている。つまり、単独化においても、他者は切り離すことができないというのである。クリッチリーは、ハイデガーの言う「被投的企投」には、「いかなる実存論的な企投によっても統べることのできない獣じみた事実性」が取り憑いていると主張していた。それにならって言えば、自助グルー

⁴⁹ 國分功一郎、熊谷晋一郎『〈責任〉の生成——中動態と当事者研究』、新曜社：東京、2020年、43頁。

⁵⁰ 一対一の面接を基本とする精神科臨床においてもまた、近年、暴力や虐待によるトラウマ、あるいは発達といった問題が全面化するなかで、「まずは免責をする」という手順を踏むことなしに治療をすすめることは困難となっている。

プや当事者研究は、単独化には他者が——それも、ときに「非本来的」とされるような気遣いをし合う他者が——取り憑いていることを示す好例なのではないだろうか？ そのことは、孤立化が他者との気遣いの関係を結び直すことでもあることを示す次の箇所においても明らかではないだろうか。

決意性は、本来的な自己存在として、現存在をその世界から引きはなすものではなく、現存在を宙に浮いた自我へと孤立化させるものでもない。(…) 決意性は自己をまさしく手もとにあるもののもとでそのときどきに配慮的に気づかう存在のうちへともたらし、たほうで自己を他者たちと共にある顧慮的に気づかう共同存在へと押しもどすのだ。(SZ298/897)

だとすれば、単独化において共同存在が「ものの役にもたない」という記述は、ハイデガーの依存忘却への批判を通じて、再考されなければならないだろう。単独化によって現存在は頽落から「連れ戻される」のではなく、実際には、他者とともにある頽落は取り憑いたままなのではないだろうか。だからこそハイデガーはこの箇所で「この単独化によって現存在はその頽落から連れ戻され、現存在にとって本来性と非本来性が現存在の存在のふたつの可能性としてあらわになる」(SZ191/552)と述べていたのではないか——必ずしもどちらかを「選び取る」のではないような仕方か？ その意味で、彼は「頽落が露呈するのは、現存在そのものの、その本質からする存在論的な構造である」(SZ179/516)と語っていたのではないだろうか。

7. おわりに

私たちは、ハイデガーの哲学を受容して成立した精神病理学における垂直方向の特権化と水平方向の軽視を問題とすることから出発し、水平方向における治癒や回復のあり方を検討するために、ハイデガーの気遣い論を再検討した。また、気遣い論の臨床への応用においては、垂直的かつ本来的な気遣いであるとされる③の垂範的顧慮において「他者が配慮的に気づかう〈なになに〉」が一切関わってこないとされている点が、ボスやベナーとルーベルの議論において積極的に援用されている一方で、ピンスワンガーやブランケンブルクの治療・回復論（あるいは発病予防論）においてはむしろ水平的でときに「非本来的」とされる②の尽力的顧慮に重要性が与えられていることを明らかにした。ついで、②の気遣いについてのさらなる検討のなかで、そのような水平的な気遣いが、自閉症者のようなマイノリティにおいてはアプリアリに成立しておらず、言い換えれば、他者に首尾よく「依存」できていない可能性があることを明らかにした。この点において、②の気遣いに関して「支配」と「依存」を何の検討もなく並置している『存在と時間』には、「依存」の肯定的機能を見逃している「依存忘却」と呼びうる特徴があることを示した。最後に、自助グループや当事者研究の経験を参照しながら、「依存忘却」という観点から『存在と時間』を読解することによって、「平準化」、「頽落」、「存在免責」といった用語もまた肯定的機能を

もちうることを明らかにした。

もちろん、このような議論は、単に水平方向の気遣いを重視すべきだという結論のみを導くわけではない。水平方向の気遣いが重要になるのは、少なくとも本稿で言及した文脈に従うならば、統合失調症のようにあらかじめ水平方向がやせ細っているケースや、自閉症スペクトラムのようなマイノリティのように共同相互存在としての相互に「依存」し合うあり方を首尾よく手に入れられていないケースであり、反対に、「大衆攻撃」ないし「大衆批判」としての②の気遣いにおける「支配」を批判的に捉える視座が必要になるケースも依然として存在するであろう。

その意味において、水平方向には、2つの異なるものがあるとも言えるのかもしれない。一方には、ハイデガーがキルケゴールの『現代の批判』から借りてきた「水平化（Nivellierung）」、すなわち社会が工業化されていく中で、みんなが同じ既製品を使い、同じような消費生活を送るようになったことへの批判が妥当するような「平準化（Einebnung）」、すなわち貧しい水平方向がある。他方では、自助グループや当事者研究のような、同じ困りごとを抱えた人々が水平的で相互「依存」的な関係性の中で相互にエンパワメントされていき、しかも、それによってみんな一緒になってしまう（平準化されてしまう）というわけではなく、逆に水平的なグループのなかで存在免責されるからこそ、責任を引き受け、垂直的に突出できることがありうるような、豊かな水平方向というものもありうるのだ。

そして、そのような貧しい水平方向と豊かな水平方向は、はっきりと分けてしまえるようなものではない。一度豊かな水平方向を作ることができたとしても、人はほうっておいても権威をつくり、ヒエラルキーをつくり、そのヒエラルキーのもとでメンバーを管理しようとしてしまう。そこには、^{おしつけ}垂直性と^{よこならび}水平性の最悪の共犯関係が生じるだろう。かくして、水平的なグループは容易に平準化されてしまう危険性にさらされているのである⁵¹。だからこそ、こういった現場には、平準化に抗する耐えざるメンテナンスが必要なのであって、それは過酷なものであると言っても良いだろう。

だとすれば、自助グループや当事者研究においても、一度システムを作れば終わりというわけではなく、ウリが制度論的精神療法について述べたように「制度内で起きることについての永続的な分析」⁵²が必要であり、つまりは現在私たちが行っている実践が硬直したものになっていないかどうかについての絶えざる問い直しが必要となる（当然、同様のことは精神病理学に依拠した臨床についても言いうる⁵³）。ハイデガーもまた、おそらくは

⁵¹ 東畑開人は、いわゆる「居場所型ダイケア」が、語源を同じくする2つのあり方——すなわち居場所としての「アジュール」と、収容所としての「アサイラム」——のあいだを移行し、居場所であったものが（「存在の声」ならぬ）「会計の声」によって容易に収容所となってしまうことを論じている。Cf. 東畑開人『居るのはつらいよ——ケアとセラピーについての覚書』、医学書院：東京、2019年。

⁵² ジャン・ウリ（三脇康生，廣瀬浩司，原和之訳）『精神医学と制度精神療法』、春秋社：東京、2016年、287頁。

⁵³ 松本卓也「イントロダクション——精神病理学を臨床で役立てるために」『精神症状の診かた・聴きかた——はじめてまなぶ精神病理学』（日本精神病理学会書籍刊行委員会編）、金剛出版：東京、2021年、5-24頁。

そのような不断のプロセスのことを、「固執」ではなく絶えざる「つかみ直し」として捉えつつ、「非決意性のうちへと喪失されているほかならぬありかたが、実存的に掘りくずされ」（SZ308/923）る必要があると表現していたように思われる。

本研究は科研費（19H01183）の助成を受けたものである。